

作者メモ

自分の性的指向がほかの多くの人たちと、社会が押しつける「ふつう」と違うとわかっていながら成長期を過ごすのは、たやすいことじゃない。ぼくの場合は運よく、比較的楽にその時期を過ごした。そして家族や友だちは、いつだって無条件にぼくを支えてくれた。けどわかってる。それはただ、運がよかっただけなんだ。この六～七年で、ぼくは多くのLGBTの若者と知り合った。ぼくの思春期よりずっと難しい状況のなかで、たびたびどうしていいのかわからなくなって、自分自身を憎んだりしてしまう少年少女たちだ。ぼくはずっと、彼らの助けになることだけを目標にしてきた。連絡がとれなくなる子もいるけど、ほとんどの場合はコンタクトを取りつづけている。そしてときが経つにつれてその子たちが見ちがえるほどいい状態になり、自分自身を愛し、自分の幸せのために闘えるようになっていくのを見ると、ぼくは彼らを誇りに思う気持ちでいっぱいになる。

問題は、ぼくはたったひとりなのに、性的指向のせいで苦しんでいる若者たちがあまりにもたくさんいること。そんなとき、この小説のアイディアが浮かんできた。目的ははっきりしていた。本を書いて性的指向に苦しむ大勢の少年少女たちの一部にでも届けば、もっと助けてあげやすくなるんじゃないだろうか。そう思いついたものの、すぐにその考えを捨ててしまおうとした。自分にそんな本が書けるとは思えなかったんだ。さんざん迷った末に書きだしてはみたが、うまくいかずに中断の繰り返しで、投げ出す寸前までいったことも一度や二度じゃない。

けどニュースだったりだれかとの会話だったり、なにかしらのできごとが絶えず起こって、そのたびにぼくは、続ける必要がある、やらなきゃいけないんだと思い直した。この小説に具体的なモデルはないが、ここに出てくる状況の大半は実際に起きたことをベースにしている。知っている人の経験を下敷きにしたものも多い。今まで話した少年少女たち、みんながこの物語の主人公の一部だ。

とてもそうは見えないかもしれないけど、同性愛嫌悪は過去のものではない。ぼくたちの社会に変わらずはびこっていて、多くの人たちが日々そのために苦しんでいる。どれほど社会が進歩したように見えても、悲しいかな、現実には同性愛嫌悪が原因で亡くなる人がたくさんいる。襲われて命を落とす人もいれば、自殺する人もいる。この本が、少しでもいいから、ほんのわずかでいいから、後押しになればいいなと思ったことがふたつある。ひとつは、あの人の性的指向はいわゆる「ふつう」じゃないというような、ひどいレッテル貼りをなくしていくこと。もうひとつは同性愛者だからといじめられている人に、その苦しみを超えたところにあるものを知ってもらうこと。嵐のあとは必ず晴れる、たとえ雲にさえぎられて、太陽そのものは見えないことがあるとしても。

この物語を書いて出版にこぎつけるまでは三年以上の長い旅だったけど、ぼくらの社会が歩むべき道はまだまだ長い。異性愛者ではないという理由で、人々が、特に未成年者がののしられたり石を投げられたりする、めった打ちにさえされるというニュースを毎週のように目にする。いうまでもなく、殺人もいまだ世界のあちらこちらで起こっている。そんなできごとを知るたびぼくは、この小説を書くことが必要だったのだという思いを日々強めている。通常とは異なる性的指向を持つ人が文学のなかで描かれたっていい、常に脇役に甘んじるのではなく物語の主人公にだってなれる、トンネルがどれほど暗くても、その先にはいつも光が射していると知る権利があるんだと、ぼくはそう確信している。

ぼくらが歩むべき道のりはまだまだ長い。でもこの小説がたとえほんの少しでも、その後押しになればいいと願っている。

プロローグ

私は朝までベッドの上にひとり座っていた
私は叫んでる、「彼らが会いに来てくれる」
そして秘密を胸のうちにおさめておこうとした
死に至る病のような心を抱えて
『コントロール』 ホールジー

光が刃に反射して、からかうような輝きを放つ。さあ続けろ、やっちまえ、一気に終わらせてしまえ、というように。ぼくはつばを飲み込む。やっちゃいけないのはわかってる。やつらに負けることになる、そんなわけにはいかない。そんなことはできない、
(だれにも、ぼくにはだれもない)

母さんのために、フェルのために。だけどころするしかないんだ。

かみそりをしっかり握り、腕に沿って走らせる。傷あとの上でちょっと止めて、やがて手首まで。もう考えちゃだめだ、こうやってぐずぐずしてたら怖じ気づく人間だって自覚している、だから目を閉じ深呼吸して、やらなきゃいけないんだ、わかってんだろと自分にいい聞かせる。

そして、切る。

今日の痛みは、いつもの慣れた痛みより強くてつらい。それで思わずうめき声を出し、意志に反してかっと目を開く。すぐに血があふれ出し、夕焼けが空に広がるように水を染めていく。見ているとめまいがした。うまくいったのか、これで十分なのかわからない、わかっているのは、ここで続けなければ、きっとぼくは投げ出してしまうということ。だから歯を食いしばり、もう片方の手首も切った。

水はどんどん赤くなり、めまいもひどくなってくる。バスタブに横になり、ぼくはもう一度目を閉じる。夕ぐれになって夜が来ても、もう開けないつもりだ。口もとまで来た水が、唇のすき間から入りこんでくる。奇妙な、鉄くさい味がして、自分の血の味なんだと気づく。

ゆっくり、ゆっくり、ぼくは闇のなかに埋もれていく。すべての星が少しずつ消えていく。

そこで目がさめた。

心臓がバクバクしている。眠っていたんじゃないくて、走っていたかのように。とび起きて明かりをつけ、部屋にひとりであることをたしかめる。また、夢を見ていただけだった。また、悪夢を。

ベッドに数滴、乾いた血のあと。それでぼくは、前腕の傷が寝ている間に開いたと気づく。脚を、腕を見る。白っぽい傷あと、まだ癒えていない傷口に指を這わせる。傷あとはいくつもあるけど、手首にはひとつもない。

少なくとも、今のところは。

第一部 アニマル・シティ

だってここはアニマル・シティ

カーニバル・ワールド

だからおとなしくしなさい、たてつかないで

あんたを噛もうとしているやつらがいるわ

『アニマル・シティ』 シャキーラ

ゲイでいるなんてクソだ

マジで。ほんとにクソだ。

ゲイだということがどんなにすばらしいか物語る映画やドラマ？ ありのままのきみを受け入れてくれる、ノンケで今どきの考え方をするクラスメートたちや、無条件にきみを愛してくれる両親に囲まれた毎日だって？

全部うそっぱちだ。

現実はそんなもんじゃない。

少なくとも、それはぼくの現実じゃない。

ぼくの現実はかくれて日々血を流すこと。

ぼくの現実は、だれにも気づかれないままゆっくり死んでいくこと。

投稿：10月26日20時58分

コメント：ゼロ

気に入ったらシェアしよう

[LinkedIn](#), [Facebook](#), [Twitter](#), [Google](#), [Tumblr](#)

第一章

こんな場所にはうんざりだ、みんなが変わってくればいいのに
手放したものの代わりを見つけるには時間がある
それにぼくは高望みしているんだ、もっと控えめにしなきゃ
我慢しようとしているんだけど、それでもまだすべてがほしい
『フールズ』 トロイ・シヴァン

「ホモ！」だれかのどなり声が、アイポッドのイヤホン越しでもじゅうぶん聞こえてくる。
「そんなに急いでどこに行くのか、教えてくれよ」爆笑しながら、別のやつがいう。「男子トイレでアレを見せてくれるやつと待ち合わせか？」

あの声はカルロス。何年も前からぼくと同じ時間に登校してくる。そしてだれかがぼくにののしり言葉を浴びせたり、いやがらせをしたりしていると、必ずカルロスも加わって、ぼくをもっとひどい目に遭わせる。それがあいつにとっての娯楽らしい。そうやって、本当はトイレでだれかと待ち合わせしたいのは自分のくせにカムフラージュしているんだ。ほかのみんなは気づいていないかもしれないけど、ぼくは気づいている。

通り過ぎるときにだれか、たぶん今声をかけてきたふたりのうちどちらかに、後頭部を叩かれた。すぐに振り返ったけど、あまりに多くの生徒がぼくの周りにいたので、だれにやられたのかはわからない。いつものように侮辱されているぼくを見て、うれしげにただ笑ったり、こちらを指さしたりしているたくさんの顔がそこにあるだけ。ぼくは拳を握りしめる。怒りで体じゅうの血が静かに、だけどすさまじい勢いで煮えたぎりはじめるのを感じている。ここにいる全員をなぐりつけ、これまでされたこと全部の仕返しをできればいいのに。痛めつけてやろう

(それを楽しみさえしてやろう)

だけど自分にそんなことができないのはよくわかっている。

その代わり、侮辱されても動揺せずにいよう、無関心でいようと思う。殴られても痛くない、やつらの言葉は風が運び去る、どうでもいいんだと思うようにする。でも、うまくいかない。来る日も来る日も、ぼくの人生をまぎれもない地獄に変えることだけを目的にしているやつらと共存するなんて、ほとんど不可能に近い。フェルの言葉を信じたい。これはただの一時的な状態なんだと信じたい。状況は変化する、もうこんなことを我慢しなくてよくなる日がすぐ来ると信じたい。

問題は、ときどき信じるだけでは足りなくなることだ。

もう。

これ以上。

無理だ。

ぼくは月曜日が嫌いだ。たぶん同世代でぼくほど月曜日を憎んでるやつはいないだろうな。つまり、週末はこういう我慢をまったくしなくていいからなんだけど。たいていは家で過ごすだけにしても、父さんから離れている限り、少なくとも穏やかに過ごせる。そして週末、父さんはあまり家にいない。でも週末以外は延々と続く拷問の時間、そのなかでも最悪なのが月曜日だ。これからまた一週間、ぼくをいじめるため、みんなパワーをたくわえてから学校に来ているんじゃないかという気がする。

でもぼくにはパワーがない。それに月曜日は苦痛の五日間、何度も何度も投げつけられる同じようなののしり言葉を我慢して、ただぼくがぼくであるというだけで延々と侮辱を受ける五日間の始まりを意味する。ぼくにできるのはただ、終わりが来るまでの時間を数えて過ごすことだけ

(そう、終わり。ああ、早く終わりが来てくれればいいのに)

週の、だよ。

五日はちょうど百二十時間。そのうち三十時間を学校で過ごす。クソみたいなことを何度も何度も我慢する三十時間。苦しみと恐れと痛みの三十時間。

かみそりやカッターにすぎることもしない三十時間。

教室に入ると、ダリオの栗色の目とぼくの目が合う。だけどすぐ、ダリオのほうから視線を外す。ぼくが来るのを待ってなどいなかったというように。でも、どれほどぼくらの仲が大きく変化しても、ぼくには今もダリオの表情が読める。自分自身の顔のようによく知っているから。いや、きっと自分の顔以上に。おそらくぼくは、ダリオがいちばんもろい部分を見せた瞬間に立ち会っていた唯一の人間だ。

ぼくにはわかる。口がいわゆるとしないことを、目がはっきりと伝えている。ダリオは、恥じている。

ぼくにもかなり責任はあるかもしれない、あれをそう呼べるとしたらだけど。でも本当のところ、ダリオがいなければ、あんなことにならなかった。ダリオがいなければ、ぼくの生活はこれまで通りに続いていた。幸せではなかったかもしれないけど、少なくとも平穏だった。それが今は、だれかがあのことを思い出すたびに必ず、ダリオの名前がぼくの名前とくっついて出てくる。仕方ないよね。たぶんぼくほど侮辱されないだろうけど、廊下でぼくを指さし笑う者が10人いるとしたら、ひとりくらいはダリオにも後ろ指をさす。かわいそうだとは思わない。ダリオがそうされて当然なのは明らかなんだから。

でもダリオが、大騒動を引き起こしたことを恥ずかしいと思っていることも確かだ。しゃべってしまったことを、この状況で見えぬふりをしていることを、そしてなにより、親友を裏切ったことを恥じている。親友だった人間を、というべきか。他のみんなと大笑いしながらも、本心では、心のどこかでは、ダリオは罪の意識を感じている。ぼくにはわかる。

少なくとも、そう信じたい。そうでなければつらすぎる。耐えられるレベルを超えている。

教室のいちばん奥の自分の机にたどり着いたら、座る前に椅子をちゃんと確認する。以前、噛み捨てたばかりのガムが椅子の上にちょこんと張り付いて、ぼくを待っていたことがある。今日は運よくなにもなかったので着席し、教科書がぎっしり詰まったリュックを開ける。宿題がない日も、家で勉強しなくていい日も、ぼくは絶対に、机のなかに物を入れたまま帰ったりしない。数学の教科書の表紙に、油性ペンのでかでかと目立つ文字で「ぼくはおかまです」と書かれて以来の習慣だ。

落書きは消えなかったので、親に見られないように表紙を破るしかなかった。そのせいで父さんに平手打ちを二発食らい、一週間おしおきされた。けど、表紙の文字を見られるくらいならそのほうがよかった。父さんのことだから、あれを見たら平手打ち二発じゃすまなかったはずだ。

教室の騒がしさから気をそらそうとして、ぼくは窓の外を見る。以前は慣れ親しんでいて、日によっては心地よくさえあったざわめきが、今では残酷で忌まわしいものになった。十一月下旬の冷たい朝。冬の訪れまであと数週間、太陽はぶあつい雲の層のうしろにかくれ、空は濃い灰色に染まっている。

ぼくの心のような濃い灰色に。

歴史の教科書を取り出して五秒かそこらで、授業の始まりを告げるチャイムが鳴る。朝はいつも、始業時間ぎりぎりに着くようにしている。そうすればほとんどの生徒はもう教室に入っていて、ぼくをいびるために廊下で待ち構えているようなやつの数も減るからだ。ただそれでも、カルロスのように（ぼくを少しずつ殺していくために）ぼくをののしるという日課を果たすためなら、遅刻してもいいというやつが大勢いる。

「調子どう？」隣の席のフェルがささやく。もうひとりのぼくの親友……いや、今となってはたったひとりの親友だ。ぼくは肩をすくめ、答える。

「この通り、あいかわらずさ」

フェルはぼくを見る。褐色の瞳に同情の色だけをうかべて。同情されるなんてぞっとする。ぶたれた犬みたいな気持ちになるんだ。ただそれと同時に、ぼくを心配してくれる人が少なくともひとりいるんだと、うれしさも感じる。ほんの少し、寂しくなくなる。

「大丈夫だよ。こんなの、すぐに終わっちゃうって。だろ？」納得できないぼくはうなり声を返したが、フェルは構わず続けた。「あいつらだってそのうち飽きてうんざりするよ、きっと」

フェルはいつもこういう。話の流れもいつも同じだ。

ぼくは答えない。善意でいってくれているのも、あいつらがきつとうんざりするのもわかっている。でも問題はそこじゃないんだ。肝心なのは、どっちが先にそうなるかってこと。あいつらか、ぼくか。そしてもっと大事なことは、うんざりしたとき、ぼくはどうするんだろうってことだ。こんなことを思うのは、その日がどんどん近づいている予感がするからで、それがぼくは気に入らない。心のどこかでその日が来るのを望んでいる、来てほしいと切望している……だけどこかで、恐れている。

カッターが恋しい。

無意識に太ももを触る。そうすると、少し落ち着く。辛抱強くならなきゃ。

朝、奇跡的になにも起こらなかった日ほど、長い休憩時間が来るのがよけいにつらい。以前は学校にいる時間のなかの小さな自由のオアシスだと感じていた二十五分。ほかのクラスメートと同じように、早く来ないかなあと待ち焦がれていた時間。今となっては、延々と続く拷問のひとつになってしまった時間。

一日のうちでいちばん、過ごし方が難しい二十五分。

授業が終わる少し前にぼくは、持ち物を全部まとめておく。この数週間で身に着けた習慣だ。こうしておけば、だれにもあまりわずらわされることなく教室を出られる。チャイムが鳴って教師が授業の終わりを告げると、ぼくは急いでリュックを肩にかけ、廊下のつき当りにある男子トイレまでダッシュする。ほかの生徒がまだ教室を出ないうちにドアを閉めれば、ぼくがどこに行ったのかだれにもわからない。

フェルと一緒に過ごせばいいんだろうし、フェルもほとんど毎日、そうしようといってくれる。だけどそんなことをしたら、フェルまでいじめの標的になる。そんなことになってほしくない。ぼくといっしょにいることですでにフェルはからかわれているし、公然と口にするわけじゃなくても、フェルのほうを見ながらひそひそ話をするやつらもいる。そういう光景を見るたびにぼくの心はかなり痛む。ぼくがフェルといっしょにいるところを、他の生徒には絶対に見られたくない。

フェルまでこんな目に遭わせるわけにはいかない。

トイレに入り、だれもいないのを確かめたら、ドアから一番遠い個室に駆け込んで閉じこもる。なかは汚くてかなり気がめいるけど、今のぼくにとってはたったひとつの避難所で、実をいうと、悲しくならない程度には慣れてしまった。掛け金がしっかりかかっていることを確かめると、便器のふたを閉じて腰かけ、この前の誕生日に姉さんからもらったアイポッドのスイッチを入れる。姉さんが出せるぎりぎりの金額で買ってくれた中古で、イヤホンではあまり高い音が聞こえないけど、ぼくの持ち物のなかでは数少ない貴重品だ。次にリュックから取り出したのは、今読んでいる『はてしない物語』。フェルを除けば、ぼくに残されたものはもうこれだけ。音楽と、本。フェルと、このふたつだけがぼくの友だち。ぼくが唯一、持っているもの……、あ、もちろんあれは別だよ。

こういうのがあるから、ぼくはおかしくならないでいられる。

『はてしない物語』は大好きな本で、もう何度読み返したかわからない。たぶん主人公のバスチアンとぼくの共通点はあまり多くないし、特に体つきは大きく違う。だけどぼくはどうしても、バスチアンを自分と同一視してしまう。なにより物語の始めのほう、そこにいる主人公はまさにぼくだ。ぼくもファンタージェン国に逃げ込んで、今起きていることを全部忘れられればいいのに。だけど悲しいことに、『はてしない物語』は文字通り、ただの物語に過ぎない。

おまけに、はてしないどころか、この物語も最初のページから最後のページまでの間に閉じ込められたできごとだ。ほかの本と同じように、必ず終わるときが来る。

でも幸い、現実から逃げ出す方法、もっとずっと簡単に別の世界を旅する方法はほかにもある。そのひとつは今ここ、ぼくの手が届くところ、自分のポケットのなかだ。太もものに触ると、ジーンズの布一枚を隔てて、それを感じとれる。ぼくはポケットに手を入れ、探し当てて、慎重に取り出す

(ぼくの忠実な友だちを)

どこに行くにも持ち運ぶあれ、カッターを。

これがいつ必要になるのかは、ぼくにだってわからない。

ほの暗い蛍光灯の下で鋭利な刃がおぼろげな光を放つ。まるでぼくの手で、狡猾に微笑んでいるかのように。微笑み返すぼくの顔が刃の表面にゆがんで映り、ここで切ることはできるだろうかとしばし迷う。

できるさ、もちろん。

いつだってカッターは助けてくれる。

すべてうまくいかないとき、なにもかもうまくいかないとき……。カッターはいつもそこにある。これもぼくの友だちだ。たぶん、いちばんの友だち。

息をころしてゆっくりカッターを腕に近づけると、いつものようにアドレナリンがほとばしって静脈を駆け巡るのを感じる。

だめだ。

できない。ぼくのいちばんの友だちはフェルだ、こんな金属片なんかじゃない。どんなことでも、なにがあっても、実際にぼくを助けることができるのはフェルだ。もうリストカットはやめなきゃいけない、こんなふうにしていちゃいけないとわかってる。勇気を出してフェルに打ち明けるべきなんだ。でも、怖い。たぶんこの話をしたら、ほんとのぼくがついにフェルにばれてしまう。自傷癖のある、いかれたゲイだということが。たぶんもうぼくといっしょにいないほうがいい、ぼくにも、ぼくが原因で起きる問題にも我慢してつきあう価値はないとフェルは思うだろう。結局みんながフェルに後ろ指をさすのは、おかま野郎の友だちだからだし、そんなのうれしいはずがないんだから。

どのみちぼくは、フェルまで失うことには耐えられそうにない。そうだよ、ぼくはエゴイストだ。

心のどこかには、カッターをしまわなけりゃいけない、いやいっそなくしたほうがいい、捨てるべきだという意識がある。カッターに頼るなんて、もうきっぱりやめるべきだと。今すぐにだってできるだろう。人目につくところに放りだして、それがぼくのものだとだれかに気づかれたら面倒なことになるけど、ごみ箱に捨てるのはいつだってできる。それともトイレのタンクに入れるか、それならきっとだれにも見つからない。そうすればぼくはついに自由になれる。

だけどカッターを捨てるのに必要な意志の力がどこをさがしても見つからず、それでぼくはまたポケットにしまう。

カッターから気をそらすため、本に集中しようとする。あと一章、せいぜい十五ページで読み終えてしまう。昨日のうちに読み終えることもできたんだけど、きっと必要になると思って、この休み時間のためにとっておいた。こうして再びファンタージェンの世界にひとり込んでいると、休み時間の終わりを告げるチャイムが鳴り、ぼくはいきなり現実に引き戻される。もうその一部でいたくはない、現実には。

だれかに指さし笑われながら教室に戻る途中、ぼくはジーンズの生地を通して、太ももにかすかにこすれるカッターの存在をしっかりと意識している。トイレで使うべきだったかと思うけど、後悔したって遅すぎる。家に帰るまで待とう、欲求を満たすには、邪魔できないほどフェルが遠くにいるときのほうがいい。

席に戻って窓の外を見る。かすかな音で、雨が降っているのだとわかる。

放課後は果てしなく遠い。

（これまでのこと）

こんなに孤独を感じたことない
あなたが愛を見せてくれたらいいのに
『愛を見せて』 t. A. T. u

「きみ次第だよ」

ぼくは緊張で両手を揉み合わせた。相手の目を見ることはできない。今からやろうとしていることですべてが変わる、それもとぶん悪いほうに変わるだろうとわかってはいたけど、もう後戻りはできなかった。やらなきゃいけない、きっと後悔するだろうとわかっている。

つばを飲み込み、口を開いた。

「まずわかっておいてほしいのは、ぼくたちの間がこれで変わるはずないってこと」ぼくは予防線を張ろうとした。「きみがそうしたいんだったら、今までとなんにも変わらないよ、ぼくはかまわない……」

うそだ。ぼくはうそをついていた。本当は、前と同じなんていやだった。もっとほしかった。もっと必要だった。だけどゼロよりは、半分だけでもあるほうがよかった。

「なあ、おれの考え通りなら……」

「待って、ダリオ。いう必要があるんだ。もう想像はついているだろうけど、つまり……ぼくからいわなきゃいけない」

「じゃあ、いえよ」

「ぼく、きみのことが好きだ」ぼくは一気に告白した。「きみにとっては複雑だね。きみはなにも変わってほしくないんだろ、でも……こうしないとだめなんだ。ただの友だちでは、もう満足できない。きみが好きだ、だから……いわなきゃいられなかった」

ぼくは言葉を続けることができなくて、黙り込んだ。だけどその瞬間、心を押さえつけていたかぎ爪が外れたような解放感を覚えた。終わった。やっといえた。だけど間違いに気づくにはもう遅すぎた。ダリオは口を開いたけど、なにもいわない。いう必要もなかった。目を見るだけでわかった。

だってダリオは、ぼくの親友だったから。

その目に浮かんだ表情は嫌悪感だった。自分の目が間違っていると思いたかったけど、そうじゃないのはわかっていた。その目に浮かんでいたのはただ、嫌悪感と軽蔑。そんな目で見られたことはこれまでなかった。

「消え失せろ」ダリオはようやくそれだけ言って、さっときびすを返し立ち去ろうとした。「ダリオ、お願いだ……」ぼくはダリオの腕をつかんで引き留めようとしたけど、ぴしゃっと払いのけられた。

「触るな、ばか。『お願いだ』なんていうな。こんなホモごっこ、どうでもいい。おれとは関係ないからな」

「行かないでよ……」ドアへと向かうダリオにぼくは懇願した。涙が出そうだった。すると祈りが通じたように、ダリオはドアの前で立ち止まった。

「ほかになにがほしいんだ」

「なにかいって」ささやくような声でぼくはいった。「お願いだ、なにかいって」

ダリオはまるで言葉を吟味するかのように、たっぷり一分ほども黙り込んだ。一瞬ぼくはかすかな希望を抱いた。ダリオの言葉を待つ間、胸をなかからハンマーで叩かれているように心臓が激しく鳴った。ダリオがついに口を開いた。

「おまえ、気持ち悪いんだよ」

そして立ち去った。

ひとり残されたぼくが一番つらいと感じたのは、ダリオの言葉じゃなかった。あの目だった。軽蔑の目がぼくのもう膜と心に焼き付いて、ダリオが立ち去ったあともずっと離れなかった。ぼくたちの間でなにかがきつと、永久に壊れた。そしてそれは全部ぼくのせいだった。

もう、もとに戻ることは決してないだろう。

※本原稿は翻訳作業中のもので、完成版とは異なる部分もございます。あらかじめご了承ください。